

支援
トークセッション
2018 秋

オリンピック

とジェントリフィケーション

ジェンダー・文化・
アクティヴィズムの観点から

佐藤由美子さん

ビート・ジェネレーションの影響を受け、インディーズの出版活動を始める。1996年『アメリカン・ブックジャム』、1999年『12 water stories magazine』の創刊に携わる。現在は新宿2丁目にあるカフェ・ラバンデリアを活動拠点に、一人出版社トランジスタ・プレスを運営。

村上 潔さん

1976年、横浜市生まれ。現代女性思想・運動史研究。近著に「[連載] 都市空間と自律的文化へのアプローチ——マンチェスター・ジン・シーン・レポート (全4回)」(『AMeeT』/2018年)。

司会：堅田香緒里 (法政大学教員)

2020年、東京でオリンピックが開催される予定です。そこで、今回の『支援』トークセッションでは、オリンピックが近づくにつれ、ひたひたと進行しているジェントリフィケーションについて考えたいと思います。ジェントリフィケーションとは、資本の「再開発」によって都市の貧困地域の地価が高騰し、その結果貧困層が都市を追われるという現象を指します。それは、単に建造物を作り替えるだけではなく、コミュニティと民衆の暮らしを破壊し、階級対立を背景に労働者階級の文化・生活・地理をミドルクラスのそれに置き換えようとする暴力だといえるでしょう。

ジェントリフィケーションは、しばしばオリンピックのようなメガイベントを媒介に遂行されてきました。たとえば2018年冬の平昌オリンピックでは、そのたった17日間の華々しい「祭典」のために、ガリワン山の原生林の木々が切り倒され、地域の農民らが十分な説明もないまま立ち退きを余儀なくされ、今なお生活が不安定な状況に置かれています。ここ東京でも、2020年開催予定の東京五輪のメインスタジアム(新国立競技場)建設のために、都営霞ヶ丘アパートに暮らす230世帯が立ち退きを迫られました。住民の多くは単身の高齢者であり、立ち退きの前後に亡くなった人もいます。いつものように、競技場周辺に住んでいた野宿生活者もやはり強制的に排除させられています。しかし、こうして民衆の生活が破壊されてきたという事実は、華々しい「祭典」の騒音に掻き消されていきました。

ここで忘れてはならないのは、ジェントリフィケーションの暴力に対しては、いつも抵抗があるということです。抵抗の一つの方法は、そこに留まるという営みつまり、占拠です。ニール・スミスは、野宿者やスクワッターによる占拠闘争は現実には「敗北」してばかりであるにもかかわらず、かれらがそうした闘争を諦めるような兆候はちっとも見られないと述べています。じつさい、ジェントリフィケーションの進行と共に、都市の公園や路上などの公共空間をめぐる占拠闘争も激化していきました。2020年に控えたオリンピックに向けて、東京という都市空間のあちこちで都市再編のプログラムが動いていますが、同時に、これに対抗するような闘争もますます活発化していくでしょう。

そこで！今回は、ジェントリフィケーションとそれへの抵抗について、特に文化やジェンダーの観点からお話ししていただける、とっておきのお二人をトークゲストにお招きする予定です。一人目は、東京オリンピックに向けた「浄化」と「再開発」の標的となっている大都市東京のド真ん中・新宿は二丁目にあるカフェ・ラバンデリアを拠点に活動している佐藤由美子さんです。そして二人目は、ロンドンにおけるジェントリフィケーションに抗するラテンアメリカ系フェミニストたちの闘い等をレポートしてくれている村上潔さんです。お二人のトークから、ここ東京で、オリンピックとジェントリフィケーションの含意を紐解き改めて考える一夜にしたいと思います。どうぞ足をお運び下さい。

2018/9/12 [wed]

16:00開始 (19時には終了)

会場

カフェ・ラバンデリア
(新宿三丁目駅徒歩1分)

参加費

無料 (ただしワンドリンクオーダー)



Café★Lavandería

〒160-0022

東京都新宿区新宿 2-12-9 広洋舎ビル 1F

TEL03-3341-4845

問い合わせ先：「支援」編集委員会 (生活書院内 ☎ 03-3226-1203)